

金沢市の子育て支援に関する実態調査（1）

— 子育てサロンを利用する核家族で乳児をもつ母親からの聞き取り —

Investigation into the actual situation of child care support in Kanazawa

— Interviews with the mothers of babies who have a nuclear family and use the child care salon —

北川 節子
Sethuko kitagawa

〈要旨〉

平成20年6月～10月の間の9日間に金沢市内のNPO版子育てサロンを利用する核家族で乳児を持つ母親19人に子育て中の困りごとと、子育てサロン利用の意義について、半構成的に聞き取りを行いKJ法で分析した。その結果、子育ての困りごとは、【親に頼ることができない】【体の不調、受診ができない】【家族に世話がかかる】【家事が大変】などによる【子育てが大変】なことであり、さらに【育児の方法や病気のことが分からない】【外出がしにくい】【アパートでは子どもの泣き声に気を使う】が加わって【不安と孤独の中での子育て】をしていることであった。子育てサロンの意義は、子育てについて【学習ができる】ことと【精神的な支えとなる】ことに加え、【大人同士の付き合いができる】【良い外出の機会となる】【子どもに良い影響がある】ことである。これによって【子育ての余裕ができる】、さらに【子育ての意欲わく】ことが認められた。フィールドとした子育てサロンは月曜日から金曜日のほぼ終日にわたって利用でき、医療専門職が支援をしている。乳児親子を対象とした子育てサロンは、乳児専用とし母親への支援を中心に考えること、いつでも自由に参加できるようにすること、さらに交流や学習の場になるように支援者はカウンセリング技術を持った専門職であることが望ましが考えられた。

〈キーワード〉

核家族 乳児 母親 子育てサロン 聞き取り調査

1 はじめに

2006年の我が国の出生数は109万2674人、合計特殊出生率ⁱは1.32であり昨年より若干上昇に転じたが、依然として人口置換水準ⁱⁱを大きく下回る状況が続いている。また2007年の年少人口は1740万2456人、総人口に占める割合は13.7%であり年々低下の傾向をたどっている。

少子化対策の最初の具体的対策は1994年「今後の子育て支援のための基本的方向について」（エンゼルプラン）であった。ついで1999年には「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実行計画について」（新エンゼルプラン）が策定され、保育サービス関係だけでなく、雇用、母子保健・相談、教育等の事業も加えた幅広い内容となった。

2003年には「少子化社会対策基本法」が制定、この法に基づき少子化社会対策会議が設置され、2004年には「少子化社会対策大綱」が閣議決定された。この大綱に盛り込ま

れた施策について効果的な推進を図るために2004年「少子化社会対策大綱に基づく具体的実施計画」（子ども・子育て応援プラン）が決定、2005年度から実施された。ここには4つの重点課題と2009年後までの5年間に講ずる具体的施策内容と目標が盛り込まれた。「子ども・子育て応援プラン」の目標値は確定当時、全国の市町村が確定作業中の次世代育成支援に関する行動計画における子育て支援サービスの集計値を基礎としている。金沢市はこの行動計画として2005年に「かなざわ子育て夢プラン」を策定した。

本研究は金沢市内の子育てサロンの利用者を対象とした研究である。子育てサロンは「かなざわ子育て夢プラン」の基本方針2「楽しくいきいきと子育てができる環境をつくる」のうち、基本施策1「子育て支援拠点の整備および機能の充実」に位置する。子育て支援拠点および機能の充実のための具体的事業としては、まず中核拠点として教育プラザ富樫・福祉健康センター・金沢駅に金沢子ども広場

を設置等があり、さらに地域拠点として幼稚園・保育所・地区児童館に「金沢子育て夢ステーション」を設置、また地域子育て支援センターや子育てサロンの充実等が挙げられている。子育てサロンは2008年には学校版、地域版、NPO版合わせて36か所あり、未就園の乳幼児とその保護者が参加して様々な活動がおこなわれている。

研究フィールドとした子育てサロンはNPO版であり、助産師が乳房マッサージを専門とする助産院と合わせて運営されている。特徴は月曜日から金曜日のほぼ終日、いつでもだれでも利用できることである。利用者は乳房マッサージに引き続いて利用したり、新生児訪問で助産師から誘われたり、他機関から紹介されたりして訪れる。助産院がある性格上、乳児を持つ母親がほとんどであり、また単独で来る人が圧倒的に多い。特別なイベントはなく、自由な時間にきて子どもを遊ばせ、母親同士がおしゃべりをして、時に助産師が話に加わるといった状況である。民家の1室にあり多い時は5～6組の親子が利用している。

子育てサロンに関する先行研究は幼稚園・保育所におけるものが多くⁱⁱⁱ、NPO版、地域公民館や児童館における研究はほとんどない。フィールドとした0歳をもつ母親の子育て上の困りごとに関する研究は、1980年に大規模に行われた「大阪レポート」と2003年の「兵庫レポート」^{iv}がある。このレポートからは4か月児の母親は孤立していること^v、子育て仲間に参加することにより効果が生まれること^{vi}、母親が子どもと実際にかかわる時間が減少していること^{vii}、子どもとの接触経験や育児経験が得がなくなっていること^{viii}、増大する育児不安^{ix}などがあげられている。

本研究の目的は、核家族の乳児をもつ母親がどのような育児上の困りごとを持っているのかを知ることと、このような子育てサロンは困りごとの解決となるのか、またどのような意義をもつのか知り、利用者のニーズに対応した子育てサロンの在り方を考えるために行うものである。

2 研究方法

2-1 対象設定

対象者は次のような手続きで募った。子育てサロン管理者に研究要旨を説明し、研究の協力と核家族の乳児をもつ母親の紹介を依頼した。サロン管理者には快く了解していただいた。調査当日、子育てサロンを利用している母親を紹介していただき、研究者からも母親に研究の目的、研究者の立場を説明して協力を依頼した。その結果19名から協力を得ることができた。

2-2 調査手続き

聞き取り調査は平成20年6月19日～10月2日の間に9日

間実施した。調査対象者とは面識がなく当日初めて会ってすぐの聞き取りになる。そこで聞き取りの前に子どもの成長などの話をして関係を少しでも和ませる配慮を行った。また乳児は母親と離れることが難しいので、子どもと同席の上聞き取りを行った。聞き取りはサロンの2階の個室でおこない、プライバシーが守られるように配慮した。

調査開始時には研究の意義、今後の活用、研究者の立場、録音、倫理的配慮について文書を提示しながら口頭で説明した。次に研究への同意の有無を確認し、同意であれば研究同意書にサインをもらった。また研究結果送付希望の有無を確認し、希望した場合連絡先の記入を求めた。19人中16人から結果について知りたいとの意向が得られた。

次に対象者の年齢、子の月齢、子の位置、住居年数、サロン利用のきっかけについて調査用紙の記入を依頼した。

調査方法は半構成的に行った。質問の流れは表1のとおりである。各々の調査時間は20分～30分であった。

表1 質問の流れ

子育てをしていて困ったり助けてほしいと思った時はどんな時でしたか。具体的にお話してください。
↓
それは1回だけですか、何回もありますか。
それはいつごろまで続きましたか。
↓
その時どんな風に思いましたか。
どのようにしましたか。どうなりましたか。
そんな助けが欲しいと思いましたか。
↓
このサロンを利用してどうですか。子育てや自分自身に変化が起きましたか。
↓
その変化について自分自身はどう思いますか。
↓
このサロンに利用はあなたにとってどんな意味がありますか。

2-3 分析手続き

録音した内容は逐語記録にして記述した。逐語記録の内容から①子育てに関しての困りごと、②現在利用している子育てサロンの意義の2点について意味のある文を取り出した。その結果、子育てに関しての困りごとからは61切片、子育てサロンの意義からは94切片が得られた。これらをKJ法によって分析した。

結果については子育てサロン管理者と検討することにより信頼性と妥当性を確保した。

2-4 倫理的配慮

自分に都合の悪いことは話さなくてよいこと、話したくなくなったら中断してよいこと、話した内容は研究以外に

は使用しないこと、論文・報告書作成時には個人が特定されないように修正がほどこされること、論文・報告書が作成された後は録音・記録用紙は適正に処分されることの5点を倫理的配慮の内容とした。対象者に調査前に文書で提示し説明した。

3 結果

3-1 調査対象者の概要

母親の年齢は20歳代後半5人、30歳代前半13人、30歳代後半1人であり、平均年齢31.3歳、最高年齢37歳、最低年齢27歳であった。子どもの月齢は2～3ヶ月児7人、4～6か月児5人、7～10か月児7人、子どもの位置は初めての子16人、2番目の子3人であった。

居住地は全員金沢市内であるが1年以内に居住し始めた人は4人、2～3年は3人、4年以上は12人であった。

サロンの利用期間は1か月以内11人、2～3か月2人、4か月以上は6人であり、最も長い人は前の子から引き続き38か月であった。

このサロン管理者である助産師は乳房マッサージを隣室で開業し、金沢市の依頼で新生児訪問を行っている。そのためこのサロンを利用したきっかけは「乳腺炎、乳房トラブルのため来院し引き続き利用」9人、「新生児訪問の時誘われて」6人、「友人に誘われて」2人、「その他」2人であった。

3-2 子育てに関する困りごと（図1）

乳児を持つ核家族の母親の子育てに関する困りごとに関しては61切片が得られた。

自分の母親が50歳代で働いており仕事が休めないため平日は助けがないことや、遠方のため困った時に簡単に来ることができないこと、夫の両親は近居しているが頼みにくいことから【親に頼ることができない】ことがあげられた。

また夫の子育て参加の調整、上の子がぐずり手のかかることから子育て中の子ども以外に【家族に世話がかかる】ことである。

「お父さんと赤ちゃんの間に挟まれたときが一番苦しいという感じで、具体的に言うとお父さんが赤ちゃんを寝かしつけようとするんですけど、赤ちゃんは私に寝かしつけてほしいって泣くんです…お父さんがイライラしても赤ちゃんをとるべきか、お父さんの勉強のために（赤ちゃんに）頑張ってもらおうかというところが一番苦しかったりするところですよ」

また乳腺炎などの乳房トラブルや病気、母親自身の夜中の発熱や病気、歯痛の時、子どもを連れて病院に行けない時などの【体の不調、受診ができない】ことも困りごとと

してあげられる。

「○日の夜中に熱が出て、病院に行かなきゃいけなくなった私が、その時は突然ですよ、1週間後の予定があるから来てほしいと言って来てもらえるのはありがたいんですが、ちょっとした病気とかの時に、ちょっとした間でも子どもを見てもらえたら良かったかなと」

さらに初めての育児なので方法が分からない、子どものちょっとした変化が生理的なのか病的なのか分からないなど【育児の方法や病気のことが分からない】こともあげられていた。

「初めての育児でどうすればいいのかも分からないし、ちょっとしたことで不安になるし」

「普段見ないような状態になった時にこれが生理的に起こるものなのか、病的に起こることなのか区別がつかない時、これって病院へ行かないといけないのかな、寝とったのにバン！と起きて泣き出すとか、これってひきつけじゃないかとか…」

また子どもが泣き続けたり夜泣きをしたり、子どもが寝ない時、夫の協力なしに1人で育児や入院の世話をする事などにより【子育てが大変】と認識されていた。

「なかなかお昼寝してくれない時、抱っこは疲れるんであまりしないでラックでユラユラ、タイヤが付いているんで、そう30分とか1時間はすぐたちますよね」

「誰もが経験していることだと思うんですが、泣いて泣いてしょうがなかったり、夜中に寝なかったりする時はどうしようと思うし、後は旦那が泊まりの出張の時とかは夜になっても気が抜けないというか任せたりできないので、それがちょっと困るかなと思う」

これは前述した【親に頼ることができない】ことや【家族に世話がかかる】こと、自分自身の【体の不調、受診ができない】こと、【育児の方法や病気のことが分からない】ことにも関係していると考えられた。

首の座らない子どもがいることや、子どもの機嫌をみながら買い物をしなければならぬため買い物ができなかったり、抱っこのために家事ができない、さらに夫の帰りが遅く不規則で生活リズムがつかめない、子育てをしながら引越作業をするなど【家事が大変】なことも困りごととしてあげられている。

「ちょっとした家事とか掃除ができないので、家の中が結構散らかって困ります。主人はあまり遅くはないが、7時半から8時の間くらいに帰ってきて、沐浴の時間が定まらなくて、なるべく早めに入りたいんですが重いので1人で入れられない。自分たちのご飯も遅くなる」

「抱っこしたら寝るけど、おろしたら泣くので家のことが何もできない、家も建てたんで片付けとかも色々あって、全部やらなくちゃいけないので大変でした」

この他には冬には外出ができないことや車で外出ができてチャイルドシートとベビーカーの操作の煩雑さによって【外出がしにくい】ことと、【アパートでは子どもの泣き声に気をを使う】ことが困りごととしてあげられていた。

これらが総合されて核家族の乳児を持つ母親にとって【不安と孤独の中での子育て】と感じられている。母親は子育ての重さや初めての子育ての不安、核家族のため子どもと2人きりの辛さを感じており、夫は生活が変わらないのに自分だけが大変な思いをしている、大人との会話ができなくなる、自分の友達ができるか心配する、無駄な時間の使い方をしているように感じ焦るなど様々な思いを持って子育てをしていることが窺われた。

3-3 子育てサロンの意義 (図2)

子育てサロンの意義に関しては94片が得られた。

まず避難場所であり何かあった時の逃げ場であること、また他のサロンに比べて乳児のみが集まるので安全な場所であり、何かあっても誰かが面倒を見てくれる安心の場であること、居心地がよく、自由に子どもを寝かせられ、おむつが替えられ、おっぱいがあげられることや母親自身が休めることで心地よく気楽な場であると認識されている。さらに子どもを中心に自分の悩みや月齢に応じた悩みを話せること、未熟児の母親の場合、同じ立場のお母さんに共感してもらえるなど母親の悩みの表出・共感の場であると認識されている。話をしたり、情報をもったり、沢山の子ども話を聞いて気が楽になる、その他ストレスが解消、気分転換、家に帰っても落ち込まないなどの意見もみられた。出産をよいものにしようと励まされて臨んだのに、未熟児を産んだ母親からは、自分のお産のイメージが良いものに变化したとの意見もあった。これらからこのサロンは母親に対して【精神的な支えとなる】場であることがわかった。

「2人でいるよりかは、こう喋っているだけで、それでも同じ空間に赤ちゃんがいて、お母さんがいてというだけでも安心が出来る。2か月の時には2か月の悩みがあって、3ヶ月になったらまたその時の悩み方があるから、一緒に話し合ったりできる」

「ここにきたら同じ未熟児の赤ちゃんがいるお母さんが何人かいて、話しているうちに共感してもらえる部分があった」

「人と話ることによってストレス解消になることが多々あるので、すごく気分転換になります」

さらに子育てについて新しい情報をえたり、先輩ママから教えてもらったりして、情報交換や学習の場になっている。また様々な月齢の乳児が来るので、実際の子どもの様子をみたり母親から話を聞くことによって、子どもの将来

がイメージできるようになる。いろんな赤ちゃんの様子を見て安心し、月齢が同じでも発達には違いがあることや大体これが普通ということを実際的に学んでいる。助産師からのアドバイスで安心するという意見も見られた。これらから【学習ができる】場としての意義が認められた。

「お話をすることができるから、1人で思っているよりああそうなんですかとお話をお聞きして思うこともあるし、逆に私こうこうこうしたけどこういう方法もあるよ、みたいな感じで言ったりできることがよいことかな」

「やっぱり自分一人の子育てじゃないですか。こういうこともあるんだとか、便利なこういう椅子があるよとか、離乳食はこうしたらいいよとか、炊飯ジャーでこういうこともできるんだよとか、いろいろ教えてもらえるんで。比較もできるんですよ、はいはいとか、寝がえりとか、なかなかできなくて心配してたけど、この頃はまだできなくて普通だよとか、あっそうなんだとか」

「インターネットとかで今いろんなものがあるんだけど、サイトで見るとはここで、こうしたらいいよとか教えてもらえるのがやはりいいですね。実際生で見て聞いたほうがいい」

「ここで〇〇さん(助産師)に聞いて尿路が短いとは聞いていたけど1,2センチとは知らなくて、あーそうかと思って。先生(小児科医)より聞きやすい。〇〇の先生は忙しいのか、話がパッと終わっちゃうんです。やっぱりそういう時とと不安になってくる」

また母親同士の触れ合いやいろんな人と知り合え友達ができる場となっている。母親は話の通じない子どもと1日の大半を過ごすのでストレスを感じている。しかしこのサロンは大人の話し相手がいる、大人との会話ができるので【大人同士の付き合いができる】場としての意義が見いだされた。

「お母さんとも話ができるんで、人としゃべるのは人間にとって必要といたら変ですけど、ずっとこの子と2人でいたら、まともに喋れない、言葉も通じない子相手に話しかけるか黙っているかなんで、それってストレスたまる。大人と話がしたい」

サロンに来ることにより家にこもらない、子どもと2人だけよりも解放的、子どもと2人だけの時間が短くなって楽だという【よい外出の機会となる】意義もあることが考えられた。さらに子どもの人見知りがなくなったり、子どもも遊べること、同じ月齢の子と触れ合って刺激になるなど、【子どもに良い影響がある】ことも実感しているようだ。

子どもが皆泣いているから自分の子も泣いていても大丈夫、イライラしなくなった、家にいる時より赤ちゃんに向き合える、産後に笑えなかったが笑うことができるようになったなどから子育てに対して余裕が生まれることが見い

だされた。サロンに来ることにより、他にも外出しようという気持ちになる、土日に夫と外出するだけだったが平日にも外出しようという気持ちになる、サロンで授乳することにより他の場所での授乳に自信がつくなどの外出の自信にもつながっている。サロンで子育て以外の会話をすることによって夫と子育て以外の会話ができ新鮮という意見も見られた。これらより【子育ての余裕】が生まれることが意義として見出された。

「今まで笑えなかったんです。気がついたらお産が住んでから笑ってないんです。でもここに来るとみんなの赤ちゃんを見たり話を聞いたりして、あっ今笑ったなって思えた時があって、良かったかなって」

「子どもが泣いていても、あー良かった、みんな泣いてるって仲間意識みたいなものがある」

「出歩くのは子どもを連れてだったら荷物もいっぱいあるし億劫だったんですが、今はちょっと行けるかなと思う。ここまで来れたし今度は同じ距離の別のところにも行ける、ここでおっぱいあげることができたし、じゃ今度はデパートとかの授乳室でもあげられるかなという自信がってくる」

また、これは前述した【精神的な支えとなる】【学習ができる】【大人同士の付き合いができる】【よい外出の機会となる】【子どもに良い影響がある】ことも関連していると考えられた。

さらにこのサロンを利用した母親からは、私も頑張ろうと思える、気持ちがすっとして今日も頑張ろうという気持ちになる、元気をもらって帰るなど【子育ての意欲がわく】ことの意義も見出された。

「週1回ここにきて元気もらって、あのママもやってるから私も頑張ろうって思えて」

「物質的に助けてもらうことがないとしても、話できるだけ、そうしたらすっとしたな、今日も頑張ろうみたいな気になれる」

この【子育ての意欲がわく】は【精神的な支えとなる】【学習ができる】【子育ての余裕ができる】ことから影響を受けていると考えられた。

4 考察

調査対象となった母親の平均年齢は31.3歳であり、出生のピークが30～34歳、ついで25～29歳にくる現状^xからみると年齢的には平均的な集団であることがわかる。

また年齢幅は27歳から37歳である。この年代の母親が子育ての援助を期待する祖母の年齢は50歳代である。平成19年の労働力調査によると45～54歳女性の労働力人口は73.2%、55～64歳は52.5%^{xi}であり、このことから祖母は就

業している人が多く、母親の急な病気等による援助は期待できないことがわかる。そのため【親に頼ることができない】ことが困りごととして挙げられる。子どもを預ける制度には金沢市ファミリーサポートセンター、一時保育等があるが利用には予約が必要である。母親の病気等、緊急で一時預かりが必要な場合に時間を問わず預ける制度は現在みられない。一人親家庭の場合一層深刻な問題となることが考えられる。これを解決する制度が今後必要となるであろう。また母親の受診時に病医院側が乳児の一時預かりをすることも解決の一つとして考えられる。

母親は【育児の方法や病気のことがわからない】ことも困りごととしてあげている。金沢市の出産前のサービスには日曜子育て教室、妊婦健康相談^{xii}がある。出産を前にした母親や父親は学習へのレディネス、方向づけ、動機づけを十分もっており、指導を行うことにより高い効果が期待できる。今後はより身近な参加しやすい場所に休日を利用した出産前の子育ての学習の機会を作り、できるだけ参加するように働きかける工夫が必要だろう。子育ての体験も必要と考えられるので保育園での保育経験、つまり石川県で行われているようなマイ保育園登録制度^{xiii}を取り入れると効果的かもしれない。父親に対しても育児の参加と母親への支援の理解のための指導が重要だと考える。

汐見らの調査^{xiv}によると0歳児の子どもをもつ父親の帰宅時間は21時台20.8%、20時台20.3%であり22時台も12.5%であった。0歳児の92.2%は家庭で過ごし^{xv}0歳児の48.8%は1人きょうだい^{xvi}である。父親が出勤し帰宅するまでの14～15時間を半数の母親は子どもと2人で過ごしている。さらに子育ては初めての経験であること、自分の体調がすぐれないことや受診ができないことから【子育てが大変】と認識されていることが分かる。父親が子育てに参加し母親の支援ができるよう、帰宅時間を少しでも早められるよう一層の努力が求められる。

そのような子育ての中で家事も同時に行うが、乳児を抱えて買い物にも行けない、家事ができないと【家事が大変】と認識されている。特に冬は寒さと雪のため外出が難しく、子どもが寝ている間、子どもを家において1人で買い物に出かけるという母親もおり子どもが危険な状況におかれることも考えられる。食品の宅配や食事を実家から差し入れてもらう家庭もありそれぞれ工夫をしていた。しかし中には高齢者家庭への配食サービスを、乳児を持つ家庭にも広げてもらえないかとの意見もあり、今後の課題ではないかと考えられる。また産後ママヘルパーの派遣^{xvii}の利用期間を延長することも対策の1つとして考えられる。

これらの困りごとが総合されて核家族の乳児を持つ母親は【不安と孤独の中で子育て】を行っている。平均的な年代の支援を求める能力を持っている母親でもこの状況であ

る。新生児訪問以外に訪問を行う、3ヶ月健診で母親同士の情報交換の機会をもつ、父親の帰宅を早めるなど、孤独に陥りやすい乳児を持つ母親への支援を充実させていく必要がある。

このサロンは助産院と併設している関係上、乳児をもつ母親が主な利用者である。子育てサロンは「公民館等を利用して、乳幼児とその親が気楽に集まり、育児の相談や友達をつくる場」であり「地域の特性を活かしながら、地域のボランティアや児童委員らが中心となって、親の育児不安解消のための支援を行う」場である^{xviii}。金沢市の子育てサロンは平成20年度は学校版7か所、地域版26か所、NPO版3か所の計36か所が運営されている。これらのサロンの実施頻度は月2回開催21か所、月1回8か所、月3回程度3か所、毎週2か所等であり、時間は午前中2時間17か所、午前中1時間半14か所等となっており、ほとんどが週のある曜日に時間帯を指定しての開催となっている。

研究フィールドとしたサロンの開催頻度は月曜日から金曜日の毎日であり、時間の指定はなくほぼ1日中利用できる。乳児を連れてきた母親は都合のよい時間に利用することができる。乳児は授乳や睡眠の時間が定まらないことが多いので、自由な時間に利用できることは母親にとって便利ようである。

金沢市の子育てサロンでは利用できる年齢を乳幼児としており年齢制限はない。しかし子どもは歩けるようになると動きが活発になり、乳幼児と一緒に過ごすことは乳児にとって危険となる。研究フィールドとしたサロンではほとんどが乳児であり、歩きまわる子どももいないため床で寝ていても安全であり、母親は安心して気楽に過ごせるようである。

サロンは民家の1室にあり家庭的な落ち着いた雰囲気をもっている。開催中に特別な企画はなく、母親は思い思いに座り自由に会話を楽しみ子どもを遊ばせている。このサロンの意義としては母親にとって【精神的な支えとなる】ことと【学習ができる】ことの意義が見いだされたが、これは今まで拡大家族や近隣住民が行ってきたと同じような支援を、サロンに集まった母親同士で、また管理者(支援者)が行っているように見受けられる。サロンの意義として【子どもにもよい影響】が一部あるが、その他は母親への効果である。乳児の親子対象の子育てサロンの場合、子どもへのサービスより母親に対する支援がより重要であることが分かる。

サロンの管理者は助産師であり医療専門職としての技術を生かして母親同士の会話がピアカウンセリングの場となるような工夫をしている。乳児と母親が参加する子育てサロンは、母親を励まし元気づける、また自信を持ってもら

えるような場になることが必要であり、支援者は保育等の知識・技術はもちろんのこと、人間関係技術、カウンセリング技術を持っていることが重要であると考えられる。

橋本^{xix}は地域の子育て家庭を対象としたプログラムにおける保育指導の役割を、1. 保護者同士のつながる機会の提供、2. 子どもや子育てを客観的に観察する機会や場面の提供、3. 保育指導の視点からの資源や情報の提供をあげている。結果からはこのサロンの意義は上記の1、2にあてはまり、子育て家庭への保育指導の役割をはたしていることがわかる。

初めての乳児を持つ母親は14~15時間もの間、子どもと2人だけで過ごすこともまれではない。話をしない子どもに語りかけることにも限界があり、夫も帰宅が遅いため十分な会話をせずに終わることも多いようである。そのためサロンで【大人同士の付き合いができる】ことも意義の一つになっている。またサロンに出かけること、つまり外出すること自体にも意義があり自信と行動拡大につながっている。

このように乳児の親子が集うサロンは多くの意義があることが聞き取り調査から明らかになった。乳児期は期間的には短く育児の中で心配は少ない期間^{xx}といわれているが、反面、虐待による死亡者数は最も多い時期^{xxi}である。0歳児をもつ母親に対して【子育ての余裕ができる】、また【子育ての意欲がわく】ための支援を行うことにより、虐待などの子育て上の問題も軽減できると考えられる。できれば各地域に徒歩圏内でいつでも利用できる乳児親子専門の子育てサロンができることを期待する。この乳児期の子育てサロンは母親の支援を中心に考える必要があり、支援者はカウンセリング技術を持った保育・医療の専門職が望ましいと考える。

5 おわりに

本研究から次の結果が得られた。

- 1) 核家族の乳児を持つ母親は子育てと家事が大変と認識しており、不安と孤独の中で子育てをしている。
- 2) 乳児を持つ母親が利用する終日開催しているサロンは、精神的な支えや学習の場であり、子育ての余裕や意欲が生まれる。
- 3) 乳児親子対象の子育てサロンは開催日・時間の制限を設けず自由に参加できるようにすること、母親の支援を中心とすること、支援者はカウンセリング技術を持った専門職が望ましい。

最後に本調査にご協力をいただきましたお母様方と、フィールドとさせていただきます子育てサロンの管理者に心から感謝申し上げます。

注

- i 合計特殊出生率とは、その年次の15～49歳までの女性の年齢別出生数を合計したもので、1人の女性が、仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に子どもを生むと仮定したときの子どもの数に相当する。
- ii 長期的に人口が安定的に維持される合計特殊出生率の水準のことをいい、近年の日本における値は2.07～2.08である。
- iii 杉山弘・東義也ほか「宮城県における子育て支援の実態（1）－保育所における地域子育て支援活動－」尚絅学院大学紀要52 p29～42 2006（この調査は幼稚園でも行われ（5）まで継続されている）野原真理・宮城重二「保育所における地域子育て支援事業への評価」香川女子栄養大学紀要Vol36 p63～69 2005、金井京子・坪井敏純ほか「子育て支援の限界と今後の課題－保育所を中心とした子育て支援活動調査から－」保育学研究43（1）p63～75 2005、丹羽さかの・安藤智子ほか「幼稚園における子育て支援実態調査（2）（2005年調査）」お茶の水女子大学発達教育センター紀要3 p17～19 2006 など
- iv 原田正文「子育ての変貌と次世代育成支援」名古屋大学出版会 2006
- v 前掲書iv P94
- vi 前掲書iv P109
- vii 前掲書iv P133
- viii 前掲書iv P144
- ix 前掲書iv P179
- x 厚生省の指標 臨時増刊 国民の福祉の動向 2008年 第55巻第12号 p12 平成19年日本人女性の人口千人対出生率の第1位は30～34歳91.5、第2位は25～29歳87.5である。
- xi <http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/index.pdf> 「労働力調査（速報）平成19年平均結果の概要 I 平成19年の就業・失業の動向」総務省統計局
- xii 日曜子育て教室は、妊娠5～8か月の妊婦夫婦が参加する教室であり各福祉健康センターで行われる。内容は妊娠中の過ごし方・栄養・子育てである。妊婦健康相談は妊娠7か月に妊婦が連絡票を各福祉健康センターに送付することによって保健師・助産師から電話や家庭訪問で相談に応じてもらえる制度である。
- xiii 身近な保育所で妊娠中に育児体験をする、また「マイ保育園」を登録することによって一時保育サービスが受けられる、これらによって子育て家庭の育児不安を解消しようとするものである。全国に先がけて石川県でモデル的に行われている。
- xiv 汐見稔幸、大日向雅美ほか「第1回乳幼児の父親についての調査」研究所報VOL1 ベネッセ次世代育成研究所 2006年
- xv 全国保育団体連絡会／保育研究所「保育白書2008年版」ちいさいなかま社 2008年 P20
- xvi http://www.jil.go.jp/kisya/dtjouhou/20021021_01_dtj/20021021_01_dtj.html 「第1回21世紀出生児縦断調査」厚生労働省大臣官房統計情報部
- xvii 産後ママヘルパーとは出産・退院後2か月以内（多胎児の場合1年以内）の母親にたいして育児・家事の支援をするヘルパーの派遣事業、派遣時間は1回2時間、派遣回数20回まで
- xviii 金沢市福祉健康局こども福祉課 金沢市少子化対策推進行動計画「かなざわ子育て夢プラン2005」P38
- xix 柏女霊峰・橋本真紀『保育者の保護者支援 保育指導の原理と技術』フレーベル館 2008年4月 p223
- xx 前掲書iv p174 「育児の中で一番心配な時はいつでしたか」の問いで10か月児健診での回答が、2～3か月、3～6か月、9～10か月が退院前後及び1か月、1歳以降に比べて低い値であった。
- xxi http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv20/dl/02_0001.pdf 「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について第4次報告」厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課虐待防止対策室 虐待に死亡事例のうち0歳は20人32.8%、ついで3歳13人21.3%であった。54.7%は実母によるもの、さらに48.8%は子育て支援を受けていなかった。

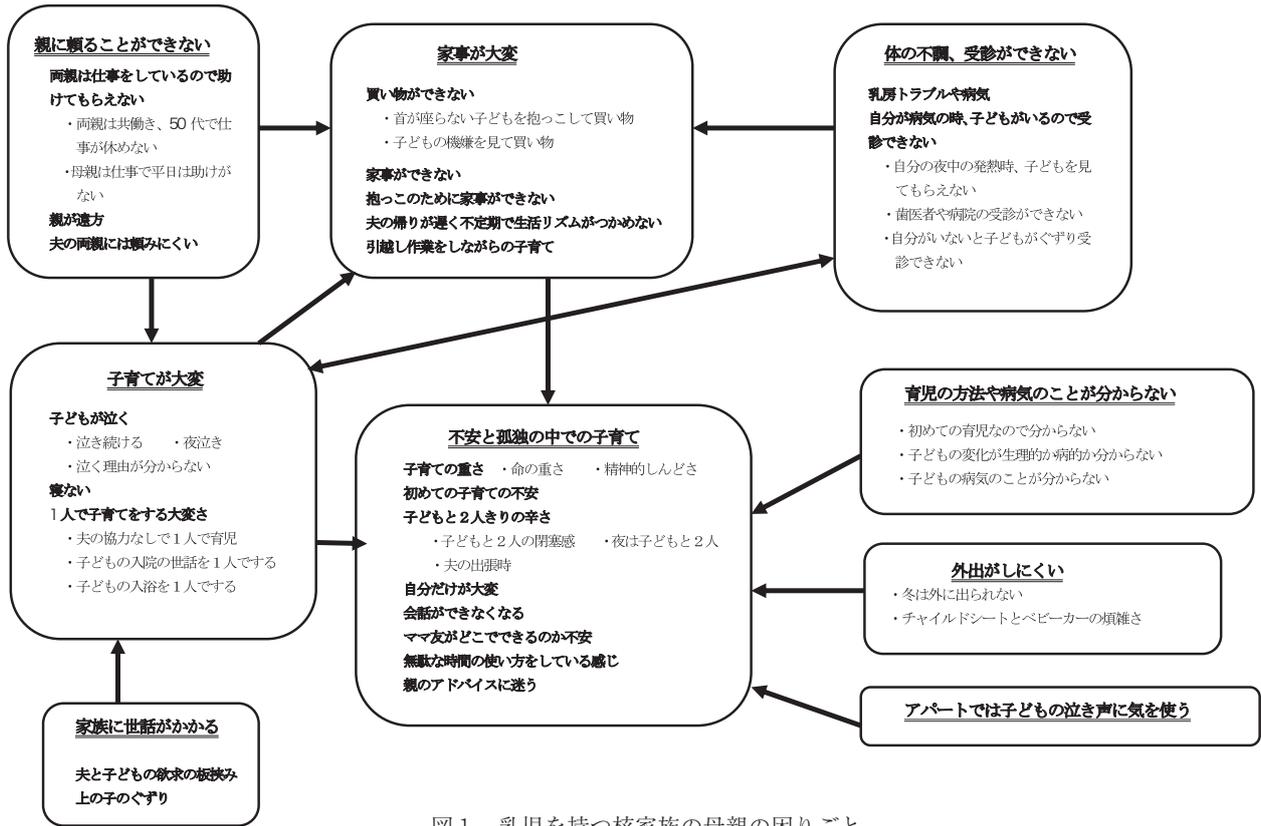


図1 乳児を持つ核家族の母親の困りごと

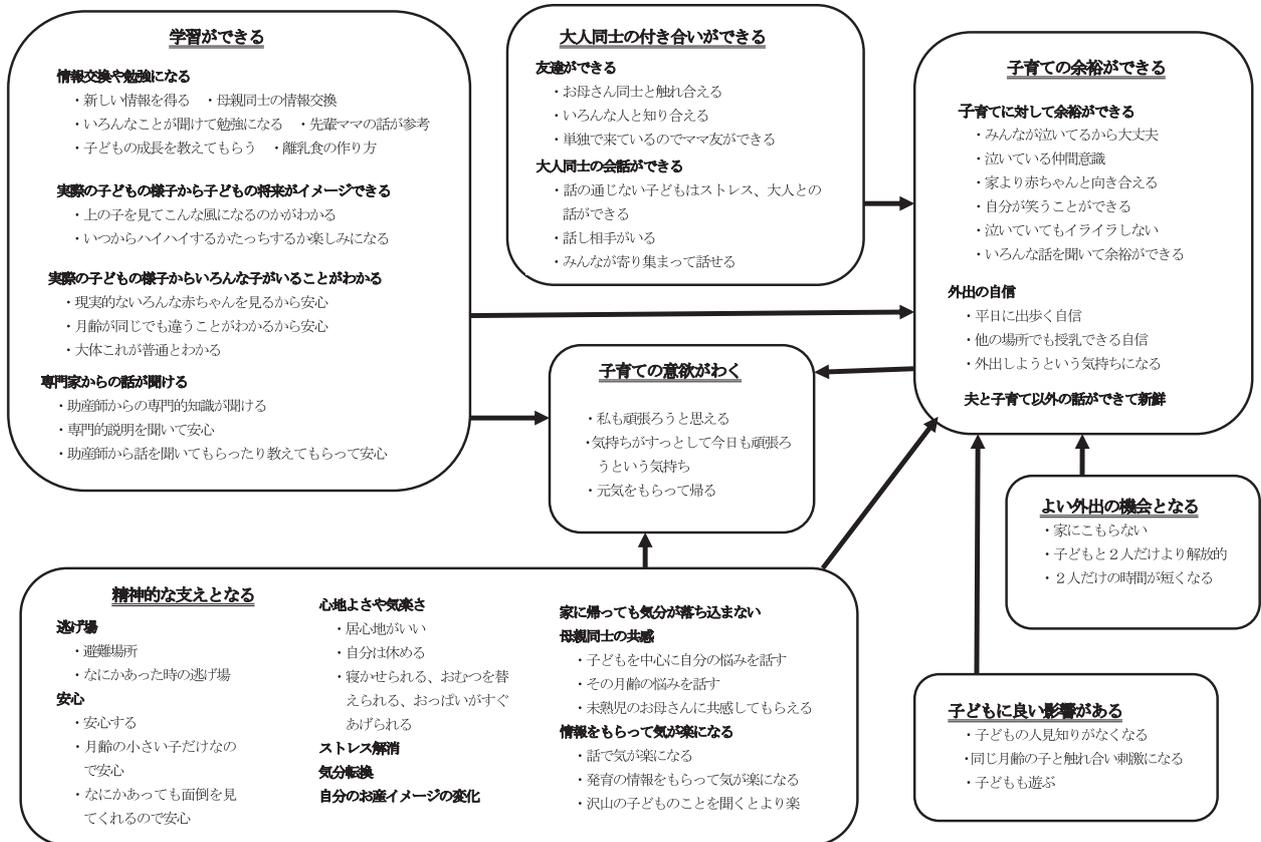


図2 乳児を持つ核家族の母親にとっての子育てサロンの意義